

自己管理スキルを応用した 成人の歯周疾患予防に影響する歯科保健行動調査

今里 憲弘^{*1} 山本 未陶^{*2} 筒井 昭仁^{*2}

目的：福岡県の成人の歯周疾患予防に影響する歯科保健行動を、自己管理スキルを含めて調査し、住民に還元する情報について実践者の立場から特定すること。

方法：予備調査にて、先に開発した児童の歯肉炎予防に関するブラッシング行動の調査項目をもとに、成人の歯周疾患予防の自己管理スキルを含む歯科保健行動の調査項目を検討した。本調査はこれに歯間部清掃用具の使用と現在歯数を加えた調査票「あなたの“健口力”チェック」を用いて、2009年11月に福岡県歯科医師会が行った歯科保健啓発事業の来場者を対象に、自記式で行った。

結果：来場者中、回答に協力が得られたのは939名、有効回答数は632名（男性184名、女性448名）、平均年齢は49.4歳（SD15.7）であった。成人の“健口力”得点は年齢と関係があった（ $r = 0.33$, $p < 0.01$ ）。性別による差がみられ（ $p < 0.01$ ）、特に男性、若い層で低かった。現在歯数との相関は小さかった（ $r = -0.13$, $p < 0.01$ ）。

結論：結果は、若い男性に対する定期健診の受診と歯間部清掃用具の使用の啓発およびブラッシングの自己管理スキルの向上につながる教育の必要性が示唆された。

〔日健教誌, 2012; 20(特別号): 8-16〕

キーワード：歯周疾患, 歯科保健行動, 自己管理スキル, ブラッシング

I 背景

日本人の平均寿命は世界一であり、日本歯科医師会は、生涯、自分の歯で食べる楽しみを味わえるようにとの願いを込めて「80歳になっても食生活にほぼ満足することができるように20本以上自分の歯を保とう」という8020運動を推進している¹⁾。福岡県歯科医師会では、平成13年度より8020運動推進事業の一環として11月7日、8日を中心とした週間を「いいな、いい歯」

週間とし、県民に対して歯科保健の重要性を広く啓発する事業を実施している。公開フォーラムを中心とした歯科保健大会をはじめ、「あなたの歯は何本？」キャンペーンや街頭活動を実施するとともに、各郡市区会や会員診療所においても独自性を生かした活動を行うなど、様々な形で啓発に努めている。

成人の歯周疾患は齲蝕とならぶ歯の主な喪失原因である²⁾。歯周疾患ひいては歯の喪失予防には、健康日本21の目標値にあげられているように、定期的にプロフェッショナルケアを受ける歯科受診とセルフケアとして歯間部清掃用具の使用が有効である²⁾。そこで、福岡県歯科医師会では平成16～18年度にかかりつけ歯科医への定期健診受診率向上のための住民意識調査を

*1 福岡県歯科医師会

*2 福岡歯科大学口腔保健学講座

連絡先：今里憲弘

住所：〒831-0045 福岡県大川市大野島2893-2

TEL：0944-88-3210 FAX：0944-86-6636

行った³⁾。また、毎年、視点を替えた歯周疾患予防に関わる内容のパンフレットを作成、配布することにより、重点的な活動を行っているところである。

平成17年歯科疾患実態調査によると成人の95.2%は1日1回以上ブラッシングを行っているが、歯肉に所見のあるものが77.5%いる⁴⁾。これはブラッシングが歯周疾患予防に効果的な方法で行われていないことを示している。すでにブラッシングが生活習慣として定着している成人に対し、歯周疾患による歯の喪失を防いで8020運動を一層推進するためには、ブラッシングを勧めるだけでなく、具体的に踏み込んだメッセージが必要であると思われる。

スキルは運動スキル (motor skills) と認知的スキル (cognitive skills) とに分けることが可能である⁵⁾。保健行動としてのブラッシングも、2つの面から構成されているといえる。運動スキルは、歯ブラシのあて方や力加減、磨けたかどうかの確認、歯間部清掃用具の使用方法などであり、従来から歯科保健指導として指導が行われてきた。もう一方の認知的スキルは、実際の行動遂行に関わっている。日常的な保健行動は多くの場合、面倒であるため、健康を大事に思っているにもかかわらず、自己管理技術が不足しては実現できない⁶⁾。つまり、丁寧な歯磨きが大切だとわかっていて改善方法も身につけているが実行できない成人が多いのであれば、自分をうまくコントロールしてそのような行動をとらせるスキル、認知的スキルを高める働きかけが必要となる。しかしながら、成人を対象とした歯科保健行動に関する認知的スキルの調査報告は見当たらない。

高橋らは、健康教育において重要な意味を持つと考えられる自己を管理する認知的スキルを自己管理スキルと名付け、尺度を開発している⁷⁾。ブラッシングと自己管理スキルとの間に関連が見られ、自己管理スキルが高い者ほどブラッシングを良く行っていることが小学生児童

を対象とした研究にて報告されている⁸⁾。しかし、自己管理スキルは一般化されたものであり、一般性の自己管理スキルとは別に行動ごとの自己管理スキルが存在する可能性が指摘されている⁹⁾。著者らは児童を対象としてブラッシングに限定した自己管理スキル尺度、ブラッシング行動スキル尺度を開発しており¹⁰⁾、これを改変して成人に適用することで、具体的に歯周疾患予防のための歯科保健行動の支援方法を知る手がかりになるのではないかと考えた。

今回の事業は、成人の歯周疾患予防に関係する自己管理スキルを示したうえで、これを含めたブラッシングの実態を調査し、実践者の立場から、歯周疾患の予防行動を促すために必要な住民に還元する情報について歯科保健活動の実践と研究開発との観点より特定することを目的とした。なお、実施には財団法人8020推進財団より平成21年度歯科保健活動助成を受けた。

Ⅱ 方 法

1. 予備調査

福岡県の成人の歯周疾患予防の自己管理スキルを明らかにするために予備調査を行った。対象は2009年8月の1か月間に福岡県歯科医師会地域保健部員12名の各診療所を受診した者のうち回答に同意した120名(男性43名, 女性77名)、平均年齢は46.6歳 (SD 17.5, 最少20歳, 最高83歳)である。児童を対象に開発した、歯肉炎予防の自己管理スキルを含むブラッシング行動スキル尺度¹⁰⁾の8項目をもとに、自己管理スキル尺度の表現を参考に、就寝前のブラッシング行動(図1, 項目3)および歯科医院での定期健診の自己管理スキルを確認するための3項目(同, 項目4~6)、歯周疾患の自覚症状への対処の自己管理スキル(同, 項目7, 8)の合計6項目を加え、14項目の調査票を試作した。全ての設問は最小値1点, 最高値4点である。設問数を減らすため、各設問の平均値(SD)が最高値の4点を上回るものは、すでに十分に

けんこうりょく あなたの「健口力」チェック（歯磨き状況）

皆様の日頃の歯磨きについてお考えを聞き、「いいな、いい歯。」週間事業に役立てようと思いますので、アンケートにご協力をお願いします。

| | | | | | |
|-----|--|-----|-----|-----------|---|
| 年 齢 | | 性 別 | 男・女 | あなたの歯は何本？ | 本 |
|-----|--|-----|-----|-----------|---|

それぞれの質問に、④いつもできている、③大体できている、②ほとんどできていない、①全くできていない、のどれか1つに○をつけてください。

| いつもできていますか？ | いつも できている | 大体 できている | ほとんど できていない | 全く できていない |
|---|--------------|-------------|----------------|--------------|
| 1 歯ぐきが腫れていないかどうか鏡で見る | 4 | 3 | 2 | 1 |
| こんなとき、歯を磨いていますか？ | | | | |
| 2 学校や職場、家庭では、周りが磨いていなくても磨く | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3 毎日、夜寝る前には必ず歯を磨く | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 歯磨きについて歯科医院を利用されますか？ | | | | |
| 4 歯科医院を受診したり、定期健診を受ける際には、事前に情報を十分収集する | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5 歯周病（歯槽のうろう）予防のため定期健診の予定を計画的に立てる | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6 歯科医院で正しい歯磨きを習うことにしている | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 歯ぐきが腫れていたり、血が出たらどうしますか？ | | | | |
| 7 何が出来ていなかったかを明確にする | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8 歯科医に相談する | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9 歯みがきに問題がなかったかどうか（力の入れ方、みがき方、ていねいさ）を反省する | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10 自分なら治せるはずだと心の中で自分を励ます | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 歯磨きの仕方についてお聞きします | | | | |
| 11 歯と歯ぐきの境目は、特に丁寧に磨く | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12 歯と歯の間は、特に丁寧に磨く | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 13 歯と歯の間は、歯間ブラシを用いて磨く | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 14 歯と歯の間は、デンタルフロス（糸ようじ）を用いて磨く | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 15 歯磨きの後は、デンタルリンス（ぶくぶくうがい用）を使う | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 16 電動歯ブラシ、音波歯ブラシを使用する | 4 | 3 | 2 | 1 |

ご協力ありがとうございました 社団法人 福岡県歯科医師会

図1 あなたの“健口力”チェック票

行われており改めて聞く必要が少ないと捉え、10項目に絞った（同、項目1～10）. 外的基準とするため、自己管理スキル尺度⁷⁾をあわせて

調査した.

2. 本 調 査

本調査は、成人の歯周疾患の自己管理スキル

を含む歯科保健行動調査を目的とした。予備調査では歯間部清掃に関する項目が選択されなかったが、歯周疾患予防には欠かせない行動であるため、新たに歯間部清掃を中心とする具体的なブラッシングに関する設問6つを追加し、最終的に16項目からなる本調査用の質問紙「あなたの“健口力”チェック（歯磨き状況）」（図1）を作成した。各項目から、それぞれの行動あるいは自己管理スキルの実態を確認すると同時に、16項目の合計得点を運動スキルと認知的スキル、実際の行動を含んだ“健口力”として検討を加えた。全ての設問は最小値1点、最高値4点であり、調査票得点は最小16～最高64点である。なお、歯周疾患には喫煙が影響するが²⁾、喫煙への対応は他の歯科保健行動と異なるため、本調査票では含まないこととした。また、これまでの歯科保健行動の結果である現在歯数を尋ね、関連を検討した。歯数は自己申告とし、不明な者はその場で鏡を用いて調査担当歯科医師とともに確認を行った。患者の報告から喪失歯数を推定することについては妥当性を示した報告がある¹⁾。

対象は2009年11月に福岡県歯科医師会が行った「いいな、いい歯。」週間啓発事業のうち、歯科保健大会1か所、街頭啓発・公開フォーラム1か所、啓発事業2か所、計4か所の来場者のうち、調査協力の得られた者とした。

調査票得点と現在歯数の年齢層による差の検定には一元配置の分散分析を、性別による差の検定にはt検定を用いた。調査票得点と現在歯数の関係の確認にはSpearmanの相関係数を用いた。統計解析ソフトはSPSS17.0を用いた。

なお、倫理的配慮として、予備調査・本調査ともに、一人ひとりに担当者が口頭で歯科医師会の保健事業の一環であること、調査への協力を断っても不利益は生じないことを説明した上で協力を依頼し、回答をもって調査の同意を得た。調査は無記名とした。

Ⅲ 結 果

1. 予備調査結果について

対象者120名の平均年齢は男性51.0歳（SD 17.5）、女性44.1歳（SD 17.1）で有意に男性が高かった（ $p = 0.04$ ）。

予備調査で選択された10項目（図1に示した項目1～10）の得点は平均27.2（SD 5.3、最小12、最高39）、男性の平均値は25.8（SD 6.4）、女性は28.0（SD 4.5）で女性が高かった（ $p = 0.04$ ）。年齢との相関は $r = 0.20$ 、 $p = 0.03$ であった。

自己管理スキル尺度⁷⁾得点は平均28.4（SD 4.7、最小14、最高40）、男性の平均値は29.5（SD 4.9）、女性は27.7（SD 4.5）で男性が高かった（ $p = 0.04$ ）。年齢との相関は $r = 0.25$ 、 $p < 0.01$ であった。

10項目のクロンバックの α 係数は0.85、自己管理スキル尺度との間には $r = 0.28$ 、 $p < 0.01$ の弱い相関がみられた。

2. 歯周疾患予防の自己管理スキルを含む、あなたの“健口力”チェック票の調査結果について

1) 対象者の年齢、性別

来場者のうち、回答協力者数は939名、有効回答数は632名（男性184名、女性448名、有効回答率67.3%）、平均年齢は49.4歳（SD 15.7、最小値20、最大値86）であった。20～40歳（216名）、41～60歳（239名）、61歳以上（177名）の3群に分けたところ、男女比は年齢層によらずほぼ3：7で女性が多かった（表1）。

表1 年齢層別人数分布（N=632）

| 年齢層 | 男性(%) | 女性(%) | 全体(%) |
|--------|----------|----------|-----------|
| 20-40歳 | 59 (27) | 157 (73) | 216 (100) |
| 41-60歳 | 66 (28) | 173 (72) | 239 (100) |
| 61-86歳 | 59 (33) | 118 (67) | 177 (100) |
| | 184 (29) | 448 (71) | 632 (100) |

表2 “健口力” 得点 (N=632)

| 設問 | 平均値 (SD) |
|-------|------------|
| 1 | 2.8 (0.9) |
| 2 | 3.2 (0.9) |
| 3 | 3.7 (0.6) |
| 4 | 2.7 (1.0) |
| 5 | 2.5 (1.0) |
| 6 | 2.8 (1.0) |
| 7 | 2.8 (0.9) |
| 8 | 2.9 (1.0) |
| 9 | 3.0 (0.8) |
| 10 | 2.7 (0.9) |
| ----- | |
| 11 | 3.3 (0.7) |
| 12 | 3.2 (0.7) |
| 13 | 2.6 (1.1) |
| 14 | 2.3 (1.1) |
| 15 | 2.1 (1.1) |
| 16 | 1.7 (1.1) |
| 合計 | 44.2 (9.1) |

2) “健口力” 得点

あなたの“健口力”チェック票16項目の得点を合計した調査票得点(以下, “健口力” 得点)の平均値は, 44.2 (SD 9.1, 最小値20, 最大値64)であった。

項目それぞれの平均値を表2に示す。「2. 学校や職場, 家庭では, 周りが磨いていなくても磨く」と「3. 毎日, 夜寝る前には必ず歯を磨く」は平均値がそれぞれ3.2 (SD 0.9), 3.7 (SD 0.6)と高かった。歯間部清掃用具および補助具の使用有無を尋ねた設問では, 「13. 歯間ブラシ」「14. デンタルフロス」「15. デンタルリンス」「16. 電動または音波歯ブラシ」の順に使用している者が少なかった。また, 歯科受診に関する設問である「4. 歯科医院を受診したり, 定期健診を受ける際には, 事前に情報を十分に収集する」「5. 歯周病予防のため定期健診の予定を計画的に立てる」「6. 歯科医院で正しい歯みがきを習うことにしている」の平均値は2.5~2.8であり, 歯間ブラシの使用有無と同程度に低かった。

3) 年齢, 性別の現在歯数と“健口力”得点

年齢層別現在歯数と“健口力”得点を表3に

表3 年齢層別現在歯数, “健口力” 得点 (N=632)

| 年齢層 | 平均現在歯数 (SD)** | 平均健口力得点 (SD)** |
|--------|---------------|----------------|
| 20-40歳 | 27.8 (2.7) | 40.5 (8.1) |
| 41-60歳 | 26.0 (4.0) | 44.6 (8.6) |
| 61-86歳 | 21.4 (7.9) | 48.2 (9.2) |
| | 25.3 (5.7) | 44.2 (9.1) |

一元配置の分散分析, **: p<0.01

表4 男女別現在歯数, “健口力”得点 (N=632)

| 性別 | 平均現在歯数 (SD) | 平均健口力得点 (SD)** |
|----|-------------|----------------|
| 男性 | 24.7 (6.5) | 41.5 (9.4) |
| 女性 | 25.5 (5.4) | 45.3 (8.8) |
| | 25.3 (5.7) | 44.2 (9.1) |

t検定, **: p<0.01

示す。現在歯数の平均値は25.3本 (SD 5.7, 最小値0, 最大値32)で, 若い層ほど多かった (p<0.01)。“健口力”得点は年齢層が上がるほど高かった (p<0.01)。

男女別現在歯数, “健口力”得点を表4に示す。現在歯数の平均値は男性24.7本 (SD 6.5), 女性25.5本 (SD 5.4)で性別による差はみられなかった (p=0.14)。“健口力”の平均値は男性41.5 (SD 9.4), 女性45.3 (SD 8.8)で, 女性が高かった (p<0.01)。

3. 認知的スキルに対する関係会員の認識の変化

福岡県歯科医師会会員のほとんどは開業歯科医師であり, 日ごろは二次予防・三次予防を中心とした歯科診療に従事している。患者への歯科保健指導も齲蝕の有無や歯周疾患の程度といった疾患の状態から提案することが多く, 保健行動の背景にある認知的スキルをはじめとする心理的要因を意識することは少ないと思われる。この度の事業実践を通じて, 少なくとも調査を担当した地域保健部員の多くに認知的スキルを考慮した歯科保健指導と健康教育の重要性についての認識の変化が実感された。

IV 考 察

1. 予備調査結果における成人の歯周疾患予防スキルの妥当性について

禁煙キャンペーン参加者を対象とする一般性自己管理スキルの報告⁷⁾では、年齢との間に有意な正の相関がみられ、性差はみられていない。今回の予備調査の対象者の自己管理スキルは、年齢と正の相関が確認された点で同様であったが、男性が有意に高く性差がみられた点が異なっていた。これは男性の平均年齢が女性と比べて有意に高かったためと考えられる。

歯周疾患予防の自己管理スキルとして設定した項目を含む10項目の歯科保健行動は、年齢との相関が確認され、一般性自己管理スキル尺度の結果と同様の傾向を備えていた。ブラッシングをはじめとする歯科保健行動は幼児期から行われ、毎日のブラッシングは習慣化している者が多い⁴⁾。しかし、自己管理スキルという点では、一般的なスキルと同様に成人以降も年齢とともに獲得されていくことが示唆された。

2. “健口力” 調査結果から示唆された住民に還元する情報について

自己管理スキルの概念を応用したことで、歯周疾患予防に関わる歯科保健行動だけでなく、その行動の遂行に必要な自己管理スキルが示唆された。また、歯科保健知識や技術の獲得に留まらず、行動変容への道筋が示された。

具体的には、各設問への回答状況より、「2. 学校や職場、家庭では、周りが磨いていなくても磨く」と「3. 毎日、夜寝る前には必ず歯を磨く」は良好なものが多かった(表2)。どちらも、従来であれば毎日の歯みがき回数として尋ねられていたものを、認知的スキルを意識することで健康教育につなげることを意図した具体的な聞き方となった項目である。対象者にとって歯を磨くことは習慣化しており、周囲の状況に影響されないことが示唆された。加えて、「11. 歯と歯ぐきの境目は、特に丁寧に磨

く」と「12. 歯と歯の間は、特に丁寧に磨く」も良好であり、歯ブラシを用いて行うブラッシングは、すでに意識的に行っている者が多かった。一方、歯周疾患予防に有効とされる歯間部清掃用具および補助具の使用は、歯間ブラシ、デンタルフロス、デンタルリンス、電動または音波歯ブラシの順に少なかった。よって、健康教育での指導は歯ブラシによるブラッシング法よりも、歯間部清掃用具の使用率を上げることに重点を置く必要があると考えられた。

また、歯科受診については「4. 歯科医院を受診したり、定期健診を受ける際には、事前に情報を十分に収集する」「5. 歯周病予防のため定期健診の予定を計画的に立てる」「6. 歯科医院で正しい歯みがきを習うことにしている」がいずれも項目11や12の歯ブラシによるブラッシングと比べて少なく、歯間部ブラシの使用とほぼ同程度の低さであった。これらの項目は、定期健診の受診に係る自己管理スキルを評価している。定期健診受診率を向上させるには、ただ受診を勧奨するのではなく、現在は低い状態にある定期健診の受診に係る具体的な自己管理スキルを高めることの必要性が示唆された。

“健口力” 得点は女性が有意に高かった(表4)。1日2回以上歯を磨く者の割合は男性よりも女性が多いこと⁴⁾、デンタルフロスおよび歯間ブラシの使用割合、過去1年間に歯石除去や歯面清掃を受けた人の割合はいずれも女性が男性よりも多いこと¹²⁾が報告されている。今回設定した歯周疾患予防の自己管理スキルおよび行動はこれらの報告と同様に、女性が良好であった。認知的スキルが高い者は実際の行動も良いことが予想されるが、今回の事業結果は健康教育につなげることを目的としており、認知的スキルと実際の行動を併せて評価し、分けての分析は行っていない。

“健口力” 得点には年齢差もみられ、年齢が高い層ほど良好であった(表3)が、現在歯の

数は年齢が高いほど少ない。歯周疾患は30歳代に発症、増悪し、40、50歳代で歯を失う最も大きな原因となっており¹³⁾、30代以前から、歯垢を除くことを意識した歯みがきや歯間部清掃用具の使用、適切な歯科受診といった歯周疾患予防行動を向上させる必要が示唆された。

今後の活動においては、成人のブラッシング行動に関して若い男性を中心とし、定期健診の受診と歯間部清掃用具の使用を支援するための情報提供が重要と考える。

3. 歯科保健活動の実践と研究開発とのつながりについて

平成20年度から成人健診の新しい考え方として特定健診・保健指導が実施されている。この新しい成人保健対策をひとつの背景として、日本歯科医師会では歯科健診の目的を従来の疾病発見型から行動・環境リスクの発見型・行動変容支援型歯科健診へと転換した標準的な成人歯科健診・保健指導プログラムを作成し、普及に努めている¹⁾。また、2011年8月10日に歯科口腔保健の推進に関する法律が施行され、国の責務はもとより国民の責務を謳うなか、国民の自主的な歯科保健行動が求められるようになった。

福岡県歯科医師会では、今回の調査結果を歯科保健啓発のためのパンフレット作成に活かすと同時に、行動変容支援型の定期健診受け皿の整備を進め、県民の歯科保健行動を支援していく方向である。また、「あなたの“健口力”チェック票」は健康教育の実践での活用を目指しており、歯周疾患予防に重要と思われる行動やスキルのうち、健康教育による変容が可能な項目を用いて作成した。具体的な活用方法として、健康教育の実施前に同調査票を用いて参加者個人の“健口力”の評価を行い、変容が望まれる項目を特定し、その項目の改善に向けて指導を行うことを想定している。なお、現在、各項目の改善を目標とする認知的スキルの向上を含む健康教育プログラムを開発中である。これ

から歯周疾患予防の自己管理スキル評価事業を進展させ、8020運動の実践に寄与したい。

文 献

- 1) 日歯ホームページ. <http://www.jda.or.jp/8020/index.html> (2011年8月26日アクセス)
- 2) 厚労省. 健康日本21. <http://www.kenkounippon21.gr.jp/kenkounippon21/about/kakuron/index.html> (2011年8月26日アクセス)
- 3) 梶谷 彰, 筒井修一, 赤間 功, 他. 住民の生の声から 福岡県歯科医師会が実施した「歯科保健に関する住民意識調査」の結果について. 日本歯科評論. 2005; 65: 155-161.
- 4) 厚労省医政局歯科保健課編. 平成17年歯科疾患実態調査報告. 口腔保健協会. 東京: 2001.
- 5) 高橋浩之. 健康教育と健康心理学. 現代のエスプリ. 2002; 12: 189-198.
- 6) 高橋浩之. 健康教育への招待. 東京: 大修館書店, 1996: 77.
- 7) 高橋浩之, 中村正和, 木下朋子, 他. 自己管理スキル尺度の開発と信頼性・妥当性の検討. 日本公衛誌. 2000; 47: 907-914.
- 8) 藤好未陶, 筒井昭仁, 松岡奈保子, 他. 小学生のブラッシング行動と心理的要因との関連性—ブラッシングに関する行動・知識・意識が歯肉炎や歯垢付着状況に与える影響—. 口腔衛生会誌. 2005; 55: 3-14.
- 9) 竹鼻ゆかり, 高橋浩之. 2型糖尿病患者の自己管理行動と認知的スキルとの関連についての検討. 日本公衛誌. 2002; 49: 1159-1168.
- 10) 山本未陶, 今里憲弘, 筒井昭仁, 他. 自己管理スキルを応用したブラッシング行動スキル尺度の開発. 口腔衛生会誌. 2009; 59: 51-57.
- 11) 河村 誠, 皆川芳弘, 川村彰子. 喪失歯数に関する患者の主観的評価の妥当性について. 口腔衛生会誌. 1997; 47: 151-157.
- 12) 厚労省. 平成16年国民健康・栄養調査報告. <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/eiyou06/pdf/01-04.pdf> (2011年9月7日アクセス)
- 13) 大石憲一, 北川恵美子, 森田 学, 他. 岡山県に

今里, 他/自己管理スキルを応用した成人の歯周疾患予防に影響する歯科保健行動調査

おける永久歯抜歯の理由について 平成10年調査と
昭和61年度調査との比較. 口腔衛生会誌. 2001 ;

51 : 57-62.

(受付 2011. 9. 26. ; 受理 2012. 1. 10.)

Report on dental health behaviors for periodontal disease prevention in adults including the self-management skills

Kazuhiro IMASATO*¹, Mito YAMAMOTO*², Akihito TSUTSUI*²

Objective: The aim of the present study was to investigate the dental health behaviors for periodontal disease prevention in adults, and to identify the information to be provided for them.

Methods: In the pilot study, the dental health behavior which includes the self-management skills of periodontal disease prevention were considered. The investigation items were carried out based on the brushing skill scales item about gingivitis prevention of children. In the main survey, data using self-administered questionnaires were collected from participants in the oral health and educational events conducted by the Fukuoka Dental Association in November 2009. The questionnaires included the self-management skill scales of tooth brushing behavior, the current number of teeth and daily oral health habits. The scales were developed based on our preliminary survey.

Results: Nine hundred and thirty nine responses were obtained in cooperation. Surveys were completed by 632 adults (184 men and 448 women), and the mean age was 49.4 (SD 15.7). The questionnaire scores were associated with age ($r=0.33$, $p<0.01$). Women had better scores than men ($p<0.01$). The questionnaire scores were low in young men.

Conclusion: The findings suggested that young men should use interdental cleaning tools and should receive dental checkups regularly, and education for young men was important for self-management skills of tooth brushing behavior.

[JJHEP ; 20 (Special Issue) : 8-16]

Key words: periodontal disease, dental health behavior, self-management skills, brushing

*¹ Fukuoka Dental Association

*² Department of Preventive and Public Health Dentistry, Fukuoka Dental College